



# 茨城大学

就業力を「根力」と名づけ  
PBLを核にした「根力育成プログラム」を実施

茨城大学は人文学部、教育学部、理学部、工学部、農学部の5学部からなる国立大学である。1949年の開学以来、地域に根ざす有用な人材を輩出し続けてきた。卒業時に身につけているべき能力を「根力（ねぢから）」と名づけて、「根力育成プログラム」を実施している。

## 卒業までに身につけるべき「根力」を育成する「根力育成プログラム」を実施

茨城大学では、早くから社会人を招き、「実社会で働くということ」について講義をしてもらう機会を設けてきた。しかし、それだけでは学生が受け身になってしまおうと考えた教員有志により、2013年度以降、学生が社会の中堅として活躍している卒業生と対話する場を設定した。これは、茨城大学の学生は能力は高いものの概しておとなしく、卒業後に社会人として活躍していくためには、在学中に主体性・積極性を伸ばす必要があるとの認識に基づくものであった。この催しは一定の成果を上げたが、対話形式のため参加できる人数に限られ、一部の学生しか恩恵に浴せないという限界があった。

2010年度の文部科学省「大学生の就業力育成支援事業GP」への応募をきっかけに、学生が卒業時に身につけておくべき力を、経済産業省の「社会人基礎力」などを参考に「根力」として整理した。具体的には、基礎的素養、社会生活力、行動力、思考力、チームワーキング能力の5つからなる。現在、根力を修得するための4年一貫カリキュラムである「根力育成プログラム」を全学的に整備中だ。「根力育成プログラム」は、<図表>のように構成されており、「フレッシュマンゼミナール」「ステップアップ科目群」「根力強化プログラム」「根力実践プログラム」を4年間で段階的に履修する。

## 大学の学びへと導く新入生向け授業と教養科目の一部を根力の視点で見直す

では「根力育成プログラム」の具体的な内容をみていこう。「フレッシュマンゼミナール」は高校までの受身の学びから大学での主体的な学びへの転換を促すことを目的とした1年次で必修の科目群だ。1クラス約20人のゼミ形式で学ぶ「主題別ゼミナール」と基本的なソフトウェアの操作法や電子メールのマナーなどITを活用する基礎を学ぶ「情報処理概論」の2科目からなる。いずれも既存の科目を根力育成という観点からリニューアルし、さらに両者の連携を密にして、学修内容を相互にフィードバックできるようにした。根力育成プログラムの各科目を学ぶスタートとなる科目である。

「ステップアップ科目群」は、2年次の学生が対象だ。人文学部、農学部では2単位の必修科目、教育学部、理

<図表> 「根力育成プログラム」の概要

各期の全学目標		根力（ねぢから）育成プログラム	
第一段階	根力養成プログラム： 学生の自発的学びを後押しし、社会で活躍するための基盤となる能力＝根力を育成するための土台を築く ①フレッシュマンゼミナール： 高校生から大学生へ ②ステップアップ科目群： 自らの方向性を確認して次の段階へ	1年	根力養成プログラム ①フレッシュマンゼミナール
		2年	②ステップアップ科目群 根力強化プログラム
第二段階	根力強化プログラム： 座学と実地体験を通じて社会人として要求される能力を理解・養成する スキル養成プログラム： 個々の分野で直接求められる基礎的スキルを養成し、「資格」としてオーソライズする準備を整える	3年	根力強化プログラム
第三段階	根力実践プログラム： 実際の活動を通じて、これまで培ってきた力を確認し、不足点を自覚して、自らを高めて行く	4年	根力実践プログラム

(\* ) スキル養成プログラムとしてはIT関係の資格取得対策講座などを実施。

(茨城大学ホームページより)

(注1) ビブリオバトル…人に勧めたい本、自分の好きな本を5分間で紹介しあい、「一番読みたくなった本」を競う本の紹介ゲーム。

(注2) PBL型インターンシップ…従来の、企業を短期間訪問して職場体験をする「体験型インターンシップ」とは異なり、企業が抱える具体的な課題に対して、企業の担当者と長期間密接に連携をとりつつ、具体的な解決策を作り上げる「実践型インターンシップ」である。

学部、工学部では選択科目としている。1年次の「フレッシュマンゼミナール」での学びを踏まえて知識や視野をさらに広げること、社会に対する見方や関心を深めて学生が自分の卒業後の進路について考えることを目的としている。内容は年度により多少異なるが、「生命倫理」「人間科学と対話の知」「文章表現錬成道場」「キャリア形成と自己実現」「ベンチャービジネス入門」など多彩な科目を揃えている。さらに2013年度からは、茨城県の産業界からの協力を得て、県内企業の経営者などが講義と懇談を行う「産業界連携特別講義」も始まり、科目は年々充実している。

### PBL 1～3年目の学生が混在するグループで 1年間かけて課題に取り組む

「根力強化プログラム」と「根力実践プログラム」は全学部とも選択科目で2～4年次に履修する。根力を強化し、修得した根力を試すための科目だ。各学部で学部の特性に合わせて企画・実施することになっている。ここでは5学部の中で最も取り組みが進んでいる人文学部の例をみていこう。

人文学部では「根力強化プログラム」「根力実践プログラム」として、「インターンシップ」「地域連携論」「プロジェクト実習」を開講している。この内、「プロジェクト実習」は、学生が自ら構想、提案したプロジェクト群の中から、各自が興味のあるプロジェクトを選び、5～9人のチームを組んで課題に取り組むPBL型授業だ。通年科目で、2～4年次で3回まで履修できる。人文学部の開講科目であるが、他学部はもちろん、単位互換協定を結んでいる近隣大学の学生も受講でき、多様な専門性を持つ学生が共に学んでいる。学年にかかわらず、初めて履修する学生は「スタッフ編」、2回目の履修となる学生は「リーダー編」、3回目の履修となる学生は「メンター編」として登録する。

「プロジェクト実習」全体の運営は、「授業担当教員」が担当する。加えて、学生チームは自分たちが取り組むプロジェクトと専門性が近い教員に「顧問教員」を依頼することができる。顧問教員は、自分のチームの学生たちが活動に行き詰まった時などに相談を受けたり、解決策をともに考えたりする役割を担う。

2013年度は合計14のチームが結成され、様々なプロジ

ェクトに取り組んだ。具体的には、地域や大学で留学生との交流イベントを行った「異文化交流プロジェクト」、地元水戸市の公園で水質調査や外来魚駆除などの活動を行った「めだかの学校復活プロジェクト」、常陸太田市と連携して、市立図書館でのビブリオバトル<sup>(注1)</sup>を開催した「ビブリオバトルin常陸太田プロジェクト」などである。また、過疎化が進む常陸太田市里美地区で地域おこし活動に取り組んだ「さとみ・あいプロジェクト」の活動は、新聞・テレビでも取り上げられた。これらのプロジェクトを通して、学生は「コミュニケーションが不足するとプロジェクトがうまく進行しない」「リーダーは強引に引っ張りすぎても他の学生がついてこない」など、それぞれが課題に直面し、不足する力を自覚したり乗り越えたりして大きく成長した。

「プロジェクト実習」の評価はチームメンバーの相互評価と、教員評価（授業担当教員と顧問教員）からなる。学生に対しては事前に、仲間内で横並びの評価をしないこと、個人的な関係にとらわれず公正な採点を行えているかも評価対象にすることなどを指導している。

なお、参加者の増加を受けて、2014年度からは従来の「プロジェクト実習」を「国際交流・異文化理解」「地域連携・地域貢献」「PBL型インターンシップ<sup>(注2)</sup>」「その他」の4つのテーマに分割して「プロジェクト実習A～D」とし、それぞれに正副2名、計8名の授業担当教員を充てることとした。テーマの幅を広げ、学生が多様な経験ができるようにすると同時に、各チーム担当の顧問教員と併せ、よりきめこまかい指導を行う。

### 今後はポートフォリオ活用や 「根力修了証」の授与などを実施予定

「根力育成プログラム」全体としては、今後は電子ポートフォリオ<sup>(注3)</sup>の活用促進などに取り組む予定だ。学生の4年間の学びの設計図であり、振り返りのツールとして利用していく。

また「根力育成プログラム」で10単位以上を修得した学生には「根力修了証」を授与し、茨城大学として、学生の就業力を保証する方針である。「根力育成プログラム」をさらに充実させ、学生の取り組みをPRしていくことで、企業の「根力修了証」に対する信頼を築いていきたいと考えている。

(注3) ポートフォリオ…学生が、自らの学修（授業）計画表や、レポート、成績、ボランティア活動の記録など、教育課程の内外を問わず学びの状況を記録・蓄積したもの。学生が自らの学修成果を振り返り、さらなる学びを計画するために活用することを第一の目的とするが、教員や職員と共有することで、履修指導、就職・進学支援などで活用できるほか、組織的な教育改善に役立てる大学・学部もある。